

Glocal Tenri



10

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.10 October 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・巻頭言
おぢば帰り
／永尾 教昭 1
- ・日本語教育と海外伝道 (39)
日本語教育と異文化伝道④
／大内 泰夫 2
- ・コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係
試論 (40)
バスカル・リスバ①
／森 洋明 3
- ・イスラームから見た世界 (16)
イスラームから信仰に対する意識を考える①
／澤井 真 4
- ・伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (31)
仏典翻訳の歴史とその変遷⑭
／成田 道広 5
- ・音のちから—中国古代の人と音楽 (4)
なぞの音は何を意味するのか?
／中 純子 6
- ・ライシテと天理教のフランス布教 (26)
フランスのワクチンパスポート
／藤原 理人 7
- ・コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観
と教えの伝播— (18)
5. コロンビアの体質9
／清水 直太郎 8
- ・ヴァチカン便り (52)
ヴァチカンの財政
／山口 英雄 9
- ・思案・試案・私案
「碑」の字表記問題再考 (15)
／八木 三郎 10
- ・図書紹介 (125)
天理大学附属おやさと研究所編
『エコロジーと宗教性の深化』
／堀内 みどり 11
- ・2021 年度公開教学講座のご案内 12

巻頭言

おぢば帰り

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

ここまで縷々述べてきたように、天理教信仰者にとってぢばへの帰参は様々な意味がある。しかし教会行政的な手続きや信仰生活の節目ごとに帰参するのは、外部から見れば不経済で非合理的に見えるかもしれない。

一例として中川よしを挙げる。中川は天理教東本大教会の初代会長になった人である。同教会は現在部内教会（天理教は信仰が伝播した流れによって教会は言わば帰属関係を結ぶ。一般に「系統」と言う）が約 400 カ所を数える有力な教会である。

中川の入信は 1890 年で、教祖はその 3 年前に身を隠しており直接会ってはいない。中川は、郷里の京都府丹波赤熊村（現京都府亀岡市東本梅町赤熊）で布教を始める。病人を見つけると信仰を勧め、その人が教理に耳を傾け始めると、ぢばに足を運ぶ。そして、病人が信仰により治癒すると、再びぢばに帰参した。当時のことなので当然徒歩である。インターネットで調べると、赤熊からぢばのある天理市三島町まで、約 76.5km あり徒歩で約 16 時間かかる。道路が整備されていない当時は、もっとかかったと思われる。時には幼い子供を背負ってぢばへの帰参を続けた。

中川の例に見られるように、天理教信仰者は、「おぢば帰り」を負担に感じるよりもむしろそれが救済の至高の手段であり、同時にそれによって布教活動へ邁進するための信仰的成人も進むと捉えている。現在は車や電車を使っての帰参が主流だが、その意味は変わっていない。これは、海外で布教する者にとってもまったく同じである。入信する人を導くと、何らかの機会にぢばへの帰参を促す。

筆者は外国人からぢばについて「なぜ、人間を宿し込んだという尊い場所が日本にあるのか」などと質問される際、「日本にぢばがあるのではない。ぢばの周りを日本と呼ぶのだ」と答える。教理的にはそうだが、現実には外国人信者がぢばに帰

れば詰所と呼ばれる信者宿泊所に泊まり、箸で食事をし布団で寝るのだ。その言語の話者がいるとか、ベッドも用意されているといったことは関わりなく、紛うことなくそこは日本なのである。

世界各地のカトリック教徒が特段パチカンのあるイタリアを意識したり、仏教徒が釈迦の生地であるインドを意識することはないと思うが、天理教の海外布教の現場では、日本発生の他宗教に比べても、より強くぢばの存在する「日本」を意識せざるを得ないのだ。それは、すでに述べてきたぢばの教理上の性格から致し方ないとも言える。

柔道は世界に普及した。しかも柔道は「礼」に始まり、試合進行もすべて日本語で行われる。ただ世界の柔道家はそれを柔道の「システム」として受容しているのであり、特に「日本」を意識してはいないだろう（柔道強国という意味で意識しているかも知れないが）。彼らに道場を降りてまで「日本」を求めさせたならば、柔道は世界には広がらなかっただろう。それは好き嫌いとは別次元の問題であり、その人物の人となりの否定にさえ繋がるからだ。

世界中に日本文化の愛好家は数多くいる。そういう人にとっては、日本に行くことは幸いなことのように思えるかもしれない。しかし、一つの宗教の信仰者の意識の中に特定の国が存在感を占めているのは、その宗教の普遍化、つまり世界宗教化という観点から考えると必ずしも望ましいこととは言えないと思う。したがって、海外布教を進める上で考慮すべきことは多々ある。

では、イスラム教はどうだろう。ムスリムにとってマッカへの巡礼は大切な信仰行為である。ただやはり彼らがマッカのあるサウジアラビアを日常特段に意識することはないだろう。マッカとぢばの意味合いが違うからだと思う。

[参考文献]

高橋兵輔『中川與志』、天理教草梁分教会、1967 年。